

第6回横濱まちづくりラボでは、「知と創造」をテーマとしたまちづくりの可能性について、慶応義塾大学 環境情報学部准教授 田中浩也氏、株式会社新産業文化創出研究所 代表取締役所長 廣常啓一氏のお二人をお招きしトークセッションを行いました。

開催概要

開催日時：平成27年1月22日（木） 14:00～16:00 開催場所：横浜市技能文化会館2階ホール1
議題：“知と創造”をテーマとしたまちづくり 参加者数：94名
参加者の構成：設計・建設・不動産業、地元協議会、金融業、大学等教育関係者、メディア関係、スポーツ関係、医療・福祉関係、IT産業、コンサルティングサービス

トークセッション「知と創造」をテーマとしたまちづくり

慶応義塾大学 環境情報学部准教授 田中 浩也 氏



近年注目される「ファブ」の概念と社会への効用、大学や鎌倉で実際に取組まれているFabLab等の活動についてご紹介いただきました。「FabLabは様々な人がデジタル工作機械を使い、まちのためになるものをつくる、新しい概念の施設です。ぜひこの関内にデジタルファブリケーションを中心としたキャンパスをつくりたい。」と熱意を語っていただきました。

株式会社新産業文化創出研究所 代表取締役所長 廣常 啓一 氏

従来型の産業クラスターの構造から、「知」をコアにしたナレッジクラスターへの転換の必要性、オープンイノベーションの重要性、まちへの波及効果などについてご紹介いただきました。「秋葉原などでの取組みを関内でどのように応用できるか」とこれからの期待感についてお話しいただきました。



●2年前に開催されたFAB9(世界FabLab会議)の際に、世界から集まった研究者等の横浜のまちの評価はいかがでしたか？

田中氏 世界FabLab会議は、これまでいわゆる創造都市と言われる都市で開催されてきました。先端テクノロジーと歴史的・文化的ストックの両方がある都市でないと開催できません。横浜がその環境にふさわしいと評価されました。関内はみなとみらい21のようになる必要はないと考えています。歴史や文化を関連付けるところで、まちのイメージをつくっていくと良いと思っています。

●秋葉原には、色々な企業や研究者等が集まってきていますが、その理由はどのような点にありますか？

秋葉原ではテーマをイノベーションに絞っています。学会の開催後に秋葉原で研究会の開催を提案すると、たくさんの研究者が集まります。研究から何かが生まれることを期待する人が集まり、それがまた人を集めるという相乗効果が起きています。

廣常氏

●FabLabの活動とまちとの関係性について何かお考えはありますか？

田中氏 鎌倉には定年退職した有能なエンジニアが多く住んでおり、FabLab鎌倉に集まってロボットをつくっています。エンジニアの方が日々おっしゃるのは、退職後は自分の持っている技術力を社会や地域のために役立てたいということです。FabLabがその技術力を発揮する場になっています。こうした場はこれまであまりありませんでした。日本の大学のキャンパスに集まる人の年齢の幅は極端に狭いですが、FabLabのようにキャンパスがまちの中を開いていくことで、海外の大学と同じくらい、いろいろなバックグラウンドの方と出会う場所になると考えています。

田中氏 家にリモコンがありすぎて不便で、それを解決したいという発想からFabLabで商品が生まれました。生活中心のアイデアが大切です。生活の中の問題意識からおもしろいアイデアが出てきて、コラボレーションが生まれ、製品になる。それを実現するのがFabLabだと思います。

●秋葉原では、まちを使った実証実験や、そこから製品開発等へのフィードバックをやっていきますか？どのようなメリットがありますか？

実証実験などは、きりがなくらいにやっています。単なる実証実験ではないのは、それがプロモーションに関わっていることです。オープンイノベーションでは、情報が外に出てしまいがちですが、そこに知恵を入れようとか、販売を担当したいとか、早い段階でのマーケットリサーチとプロモーションができるというメリットがあります。

廣常氏

●研究や企画などの場が立地するまちは、どうあるべきだとお考えですか？

田中氏

FabLab世界会議は、ロッテルダムではなくアムステルダム、マドリードではなくバルセロナ、ニューヨークではなくボストンで開催されてきました。私は産業の集積地と、産業と文化芸術の絶妙なハイブリッドができるまちは分けて考えています。横浜はその両方を混ぜ合わせられるところが売りだと思います。

研究者の日常の視点では、湘南藤沢キャンパスは基礎的な研究をする世間から隔離された場所、関内は社会実習をやる場所です。その1時間という距離感の中で、頭の中で色々な結合が起こります。周辺地域との関係の中で、横浜の魅力をつくっていくことが、ほかのどの都市とも違う都市となる上で大事なことだと考えています。

●もしお二人が横浜に住むとしたら、どのような点が変わってほしいと考えますか？

施設や機能の問題ではなく、人のネットワークが重要だと思います。人が集まる環境があれば、そこは居心地のいい空間になると思います。

廣常氏

田中氏

海外からの訪問客は、私の自宅のある鎌倉を非常に喜びます。それは仏像や神社、お寺を見ることができるからです。海外ではできない経験ができる環境が横浜にできればいいと思います。

●リチャード・フロリダの研究では、21世紀の経済・社会を牽引していくようなクリエイティブクラスが集まるためには、仕事を終えた後の生活環境が重要だとしています。

ある外資系企業を誘致した際には、ビルにパブを入れてほしいと言われました。アフターを楽しむ場、色々な人を連れて来られる場がクリエイティブクラスを惹きつけると考えています。場に加えて、集まる人を仲介するファシリテーターのような人がそこにいることも大事です。

廣常氏

田中氏

鎌倉湘南地域にはライフスタイルにこだわる方が非常に多い。鎌倉にはITベンチャーが集まるカマコンバレーがありますが、そういう人たちは、海があって、食べ物がおいしくて、安心して子育てができる環境として鎌倉を選んでいますが、先端的でクリエイティブなライフスタイルを求める人たちにとっては、横浜がもっと特徴的で面白い場所になる必要があります。モビリティや食べ物、スポーツができる環境などいろいろな魅力の作り方ができると思います。

●小さな子どもの子育てから、専門教育を行う大学まで含め、教育機関の必要性についてはどうお考えですか？

田中氏

創造的な職種についている人ほど、子どもの創造的な教育に敏感です。インターナショナルスクールに入れたいとか、子どものアフタースクールに高い関心を持っています。例えばFabLab鎌倉は電子工作やプログラミングなどの新しい学びを安心して受けさせられる場所です。そういう新しい学びのパッケージをきちんとまとめるといいと思います。

企業が研究やビジネスを社会に伝えるための教育をCSRとして取り組み、学校では学べないような教育をやることで、遠いところからでも親御さんが子供を連れてやってきます。

企業が教育のためのプログラムをつくり、小中学校の公式なプログラムとするのは典型的な公民連携です。学校は新しい教育を実践でき、企業は自分たちの商品のファンをつくることにつながる。良い循環ができます。

廣常氏

田中氏

横浜には広い道や公園など、子どもを外で遊ばせておく環境が既にあります。クリエイティブなプログラムもまちの中にあります。妻は、鎌倉の方がお茶会や着物のスクールなど生活を充実させてくれるカルチャーが多く、離れられないと言っています。そういうカルチャーが無いと、女性や子どもが動かないと思います。

●マンションの購入においても、8割ぐらいは奥様が意思決定をしていると思います。横浜も女性が良いといってくれるようなまちになると、よりよいまちづくりになると考えます。

田中氏

私の母ぐらいの年代にとっては嫁入り道具としてのミシンがありましたが、最近はそのデジタルミシンに代わってきていたりします。ファッション系のFabLabを横浜につくりたいと考えていますが、このように女性の創造力を高める環境もどんどん増やしていきたいと思います。

参加者の感想

- もう少し時間をとって、じっくり聞いてみたい内容だった。
- 有益なお話だった。「あったらいいな」ではなく、「これをやりたい」というアクションを起こす人たちを集めるのがまちづくりラボ。
- 文化体育館も長期的に連携していけるしかけも、このラボで考えたい。

- コンテンツの面で協力していきたい。
- 横浜、関内の新たな街づくりにとっても興味を持てた。ぜひ協力していきたい。
- 一般市民がどう参加するのか、市民として気になりました。
- オープンに開催されているが、地元住民の参加が少ないと感じた。